

川崎コリアタウン構想をめぐる地域社会

五味田 恵美子

1. はじめに

現在、在日韓国・朝鮮人の人口は約70万人を数える。「在日」といっても、それぞれの来日目的、居住年数、日本での生活における展望も異なり、多様化してきており、一概にくくりにはできない。そして、ニューカマーズの到来による地域社会の変容や彼らのライフスタイルや意識の変化により、今、「在日」は新たな転機を迎えているように思われる。

そこで、地域社会のなかで在日韓国・朝鮮人と日本人がどのように生活してきて、現在に至っているのかという関心から、川崎において「在日」の間から持ち上がったコリアタウン構想に注目した。そして、聞き取り調査に基づきながらこの構想の背景や地域住民の認識をとらえることで、川崎という一地域社会の姿を鮮明にしようと試みた。

2. 「在日」コミュニティーに関する近年の研究

これまでの在日韓国・朝鮮人に関する研究は、渡航史に始まり、経済的、政治的な側面から歴史的に「在日」をとらえるものが多かった。

近年では、在日韓国・朝鮮人を、急増するニューカマーの定住化の先例として位置付けていると、いろいろな視点からの研究がみられる。例えば、「在日」という枠組みのなかで多国籍化し、変容する人々の動的な〈位置〉や〈方向〉、〈空間〉(文, 1994)や地域社会レベルにおける民族関係に視点をおいている。これらの研究においては、「在日」のみを対象にしたものが多く、地域社会の現実といっても、クリアーにみえてこないところがある。

そこで、本稿では、「在日」の人々にのみ焦点をあてるのではなく、地域社会レベルの視点で、在日韓国・朝鮮人と日本人を対象に聞き取り調査を行った。

3. 地域の概要

まず、川崎コリアタウン建設の対象となっている川崎市臨海部地域の概要について述べたい。浜町のセメント通りには現在、飲食店を中心に約60店舗が立ち並んでいる。そのうち、約18店舗ほどは、在日韓国・朝鮮人の経営する焼肉店などである。ここにはセメント通り商栄会という商店主の集まりがあるが、あまり積極的な活動は見られない。1945年の川崎大空襲後、焼け野原になったこのセメント通りに在日韓国・朝鮮人もバラックを建てて住み着いた。当初は焼肉店ではなく、赤ちょうちんのような飲み屋が2軒ほどあって、在日韓国・朝鮮人の家庭で食べていた内臓を焼いてだしたのが始まりだという。この味が労働者たちに受け、思いのほか繁盛したので、周辺で鉄屋を営んでいたひとたちも商売がふるわなくなると、焼肉店に転身していき、現在の焼肉店街が形成されていったのである。

一方、近くの桜本商店街は、かなり大規模な商店街である。日用品や食料品店などを中心に現在93店舗が加盟している。韓国・朝鮮の総菜店なども7店舗ある。この周辺には在日韓国・朝鮮人が多く住んでおり、商店街を利用する人も多い。1991年には、桜本商店街振興組合は「在日韓国・朝鮮人との共生」を地域活性化の柱に据えた(「統一日報」, 1994. 6. 3)¹⁾。

これらの地域は、「企業城下町」といわれるほどに、日本鋼管と密接にかかわりあっている。日本鋼管は臨海部の工業地の大半を占めている。京浜工業地帯の一大拠点として、全国から若い労働者を集めてきた。しかし、近年の不況や「鉄冷え」で、リストラクチャリングが始まった。日本鋼管の従業員は激減、勤務先を東京などに求めるようになったという(「統一日報」, 1994. 6. 3)。川崎市の人口は年々増加傾向にあるのに、これらの地域を抱える川崎区の人口は減少を続けている。ここ20年で2万人近く減っている(「川崎市統

計)。このような過疎化は、地域をはじめ、地元商店街にとっても死活問題となっている。そのようななかで、地域の活性化を図り、この危機を乗り越えていくためにも、地域住民が力をあわせて、新たなまちづくりを創造していこうという試みが見られる。桜本、池上町、大島や浜町を対象とする「おおひん地区街づくり協議会」²⁾をはじめとし、先の商店街などのような動きも見られる。コリアタウン構想もそのひとつである。

4. 川崎コリアタウン構想の背景

(1) 川崎コリアタウン構想

1992年、在日韓国・朝鮮人の二世12人が「川崎に横浜・中華街に負けないコリアタウンをつくらう」と「コリアタウン実現を目指す焼肉料飲業者の会」を発足させた。ある在日一世の呼びかけがきっかけであった。1994年、日本鋼管が土地を売り出したのを契機に、1995年、新たに川崎コリアタウン協会設立準備会の再組織化を図り、コリア

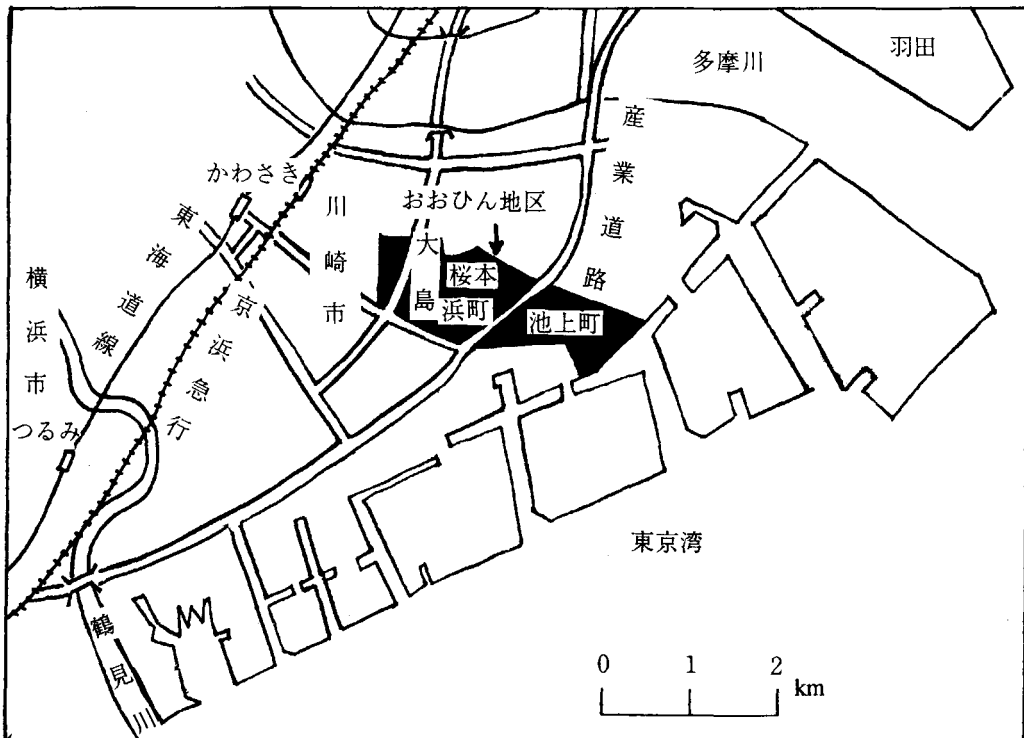
タウン構想案を明確にした。

川崎コリアタウン建設は、現在焼肉店が集中しているセメント通りを中心に行う既成市街地改善型の街づくりと、臨海部工業リストラのなかで実行される都市づくりとの二つに大別される。そして、コリアタウンが文化や経済の国際的な交流拠点となるような開発を行っていくことを目指すものである（川崎コリアタウン協会設立準備会、1995）。

(2) 川崎コリアタウン構想の背景

このようなコリアタウン構想が持ち上がった背景には「コリアタウン構想案」からもいろいろな要因が考えられる。ここでは、この背景や地域社会の姿をよりクリアに見ていくためにも、この川崎コリアタウン構想の呼びかけ人に焦点をあてていくことにする。

呼びかけ人であるAさんは在日一世であり、このAさんが3年前にコリアタウン建設を呼びかけてまわったのが始まりである。しかし、コリアタ



第1図 調査地域 (川崎区臨海部)

第1表 神奈川県朝鮮人人口推移

| 年月日 | 総人口 | 男 | 女 | 備考 |
|-------------|--------|--------|--------|-------------------------------|
| 1910 | 50 | | | 日韓併合 |
| 1911 | 56 | | | |
| 1912 | 71 | | | |
| 1913 | 82 | | | |
| 1914 | 85 | | | 第一次世界大戦（～18） |
| 1915 | 64 | | | |
| 1916 | 112 | | | |
| 1917 | 213 | | | |
| 1918 | 350 | | | |
| 1919 | 360 | 302 | 58 | 3. 1 運動 |
| 1920 | 514 | 452 | 62 | |
| 1921 | 532 | 491 | 41 | |
| 1922 | 902 | 840 | 62 | 自由渡航制／阪済直通航路開始 |
| 1923 | 1,860 | 1,751 | 109 | 関東大震災 |
| 1924 | 4,028 | 3,692 | 336 | 旅行証明書所持業務化 |
| 1925 | 5,561 | 5,058 | 503 | 渡航阻止制 |
| 1926 | 6,158 | 5,316 | 842 | |
| 1927 | 7,253 | 6,198 | 1,059 | |
| 1928 | 10,207 | 8,524 | 1,683 | 渡航条件強化 |
| 1929 | 9,042 | 7,276 | 1,766 | 世界恐慌 |
| 1930 | 9,794 | 7,547 | 2,247 | 昭和恐慌 |
| 1931 | 9,483 | 7,066 | 2,417 | 満州事変勃発 |
| 1932 | 10,525 | 7,489 | 3,036 | |
| 1933 | 12,976 | 8,895 | 4,081 | |
| 1934 | 13,075 | 8,933 | 4,142 | |
| 1935 | 14,410 | 9,207 | 5,203 | |
| 1936 | 14,597 | 9,267 | 5,330 | |
| 1937 | 15,077 | 9,396 | 5,681 | 日華事変（日中戦争本格化） |
| 1938 | 16,663 | 10,111 | 6,552 | 朝鮮人陸軍特別志願兵令公布 |
| 1939 | 20,935 | 12,429 | 8,506 | 第2次世界大戦／創氏改名施行／国民徴用令公布／強制連行開始 |
| 1940 | 24,842 | 15,592 | 9,250 | |
| 1941 | 37,877 | 26,133 | 11,744 | 太平洋戦争 |
| 1942 | 43,392 | 30,215 | 13,177 | |
| 1943 | 54,793 | 40,498 | 14,297 | 朝鮮人徴兵制実施公布 |
| 1944 | 62,197 | 46,649 | 15,548 | 朝鮮人徴兵制開始 |
| 1945. 8. 15 | 58,818 | 43,939 | 14,879 | ポツダム宣言受諾，無条件降伏 |
| 1945. 11. 1 | 44,947 | 33,520 | 11,427 | |

出所：神奈川県と朝鮮の関係史調査委員会
 『神奈川県と朝鮮』1994年3月

第2表 川崎市の在日韓国・朝鮮人数

| | 川崎市 | | | 川崎区 | | | 田島地区 | | |
|------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|--------|--------|
| | 人口 | 「在日」人口 | 「在日」比率 | 人口 | 「在日」人口 | 「在日」比率 | 人口 | 「在日」人口 | 「在日」比率 |
| 1965 | 854866 | 9069 | 1.1 | | | | 76842 | 3506 | 4.6 |
| 1970 | 973486 | 9371 | 1.0 | 253562 | 6394 | 2.6 | 71677 | 3433 | 4.8 |
| 1975 | 1014951 | 9276 | 1.0 | 217408 | 5890 | 2.7 | 59374 | 3175 | 5.3 |
| 1980 | 1040802 | 9088 | 0.9 | 202443 | 5566 | 2.7 | 54406 | 2885 | 5.3 |
| 1985 | 1088624 | 8964 | 0.8 | 190412 | 5361 | 2.8 | 49105 | 2644 | 5.4 |
| 1990 | 1173603 | 9835 | 0.8 | 195245 | 5190 | 2.7 | 49644 | 2413 | 4.9 |
| 1994 | 1202069 | 9267 | 0.7 | 197841 | 4902 | 2.5 | 48999 | 2234 | 4.6 |

出所：『川崎市統計書』

ウン建設に向かってこれからというところで、1年前に他界されてしまった。そういうわけで、本人に直接話を聞くことはできないので、Aさんの長女から話を聞くことで、出来る限りの範囲でその背景に迫ることを試みた。

Aさんは、祖国に対する愛情がとても強い人だったという。最初は朝連（在日本朝鮮人連盟）に入っていたが、総連³⁾と民団⁴⁾にわかれたとき、総連に入った。若いときは下関や大阪を転々とした後、川崎に落ち着く。川崎に親戚がいたことや日本鋼管で韓国・朝鮮人労働者がたくさん働いていたことから川崎のほうが気分が落ち着いたようである。川崎では好きな人もでき、22歳で結婚。戦後も日本に残る。高度成長期には、a商会というトラックの会社をつくり、砂利業を営んでいた。その後は総連系の教育機関や商工会で働く。しかし、あるとき総連に矛盾を感じて脱会、民団系に入る。「これではだめだ。自分には他にやることがある。川崎にコリアタウンをつくらう」。このとき、頭の中で考えていたことが形になってきていた。また、民団に入ったのは韓国に行き来するために韓国籍になったことも一因となっていた。最終的にはb食品株式会社の取締役をつとめる。

Aさんは9歳のときに父親を亡くした。姉が二人、弟が二人いた。Aさんは長男だったこともあり、母親を助け、一家を担って行かなくてはならないという思いがあったようである。母親が頑張っていたが、それだけではきついたので、将来のために単身で日本にやってくる。日本では、親戚にやっかいになる。大学は金銭的に無理なので断念した。

そして、Aさんは40年ぶりに親や兄弟のいる韓国を訪れた。年老いた母親に会ったとき、親不孝したなど実感した。そして、親や兄弟のめんどろをみたいとも思った。韓国にもお金の面で何か協力して貰いたい。

生前、「韓国で死にたい」と言っていたこともある。しかし、在日韓国・朝鮮人は、祖国に帰っても行き場がなく、今住んでいるところが故郷となっている。祖国を離れ、川崎で住み続けてきて、地域の人にも恵まれ、妻や子もいることから、在日の多いこの川崎で自分たちの故郷となるような住みやすいまちをつくってほしいと思ったようである。それに時代の流れもあったようである。か

つて朝鮮人は人間とみなされない風潮があった。それに対し、これではいけないと思い、国会まで人権擁護のデモに行ったり、反対運動に参加し、権利を求めて闘った経験がある。また、高齢者の福祉問題についても考えていた。1世は高齢化しているが、齢をとっても集まる場や行き場がないことから、十数年前から、在日の老人会館があればいいと願っていたという。在日の高齢者は、日本で一生懸命働いてきたのに、老後さえも楽しみを見いだせずまま、死んでいってしまう。高齢者の福祉施設を充実させたい、最後くらい楽しく過ごさせてあげたいという思いがあったという。この地域には老人ホームやふれあい館があるが、規模が小さいという。また老人ホームにはなかなか入れないという現状もあった。そして、「韓国人が韓国人として生きていける、住みやすいまちづくりをしていきたい。チャイナタウンのようにコリアタウンがあってもいいんじゃないか」と立ち上がったのである。

そこでまず何から始めるかということになり、焼肉料飲業者集めをした。1992年の焼肉料飲業者の会発足まで、Aさんは、毎日、一件一件歩いてまわり、「在日」の人々や日本人に自分の夢を話してまわった。入退院をくりかえしていたが、病院にいるあいだ、時間があくとする、外出届けをだして、歩き回っていた。ここまでAさんを動かした信念のうらには、地域社会に貢献し、認められたという思いがあったようである。地域の清掃も積極的に行うようになった。実際、桜本商店街の人たちも、地域の「在日」の人が買いにくるから商店街が成り立つと言っているそうである。

このように、Aさんの人生や考えに触れることで、Aさんを取り巻く環境（地域社会）の変化もさることながら、Aさんの「家族」や「民族」に対する強い思いを読み取ることができた。その思いを強くさせ、行動に移させたのは、やはり祖国での母との再開が大きく関係しているように思う。多くの在日一世の思いの代弁でもあるが、この構想にはAさんの生い立ちも密接に関わりあっているのである。

5. 川崎コリアタウン構想への住民の認識

—地域住民への聞き取りを通して—

ここでは、前章でみてきたような川崎コリアタウン構想を地域住民はどのようにとらえているのかを聞き取りを通してみていく。

(1) 聞き取りから

◆ケース1：焼肉店を営む在日韓国・朝鮮人 Bさん

Bさんは、セメント通り商栄会の副会長、焼肉料飲業者の会の副理事長を務める。コリアタウン構想については、「理想として、次の世代まで一歩でも前進できるように川崎の名物にできたらな。それにこたえるよう、焼肉店が頑張る。」と語る。「反対理由はないが、なかには偏見もっている人もいる。例えば、在日韓国・朝鮮人にのっつけられるとか。商店街にとっては、人が集まるのはいいことで、焼肉街にしようというのではなく、地域をよくしよう、活性化しようという思いをもって。都市計画が進めば、人も流れてくるのでよい。地元からももっとアピールせねば。」と答える。今後の抱負については、「コリアタウン目指して、どんどんまちを大きくしていきたい。ここが故郷だから、自分たちのまちとして生きていきたい。お墓もつくってある。みんな日本で暮らしていこうとしている。帰る人はいない。」と語ってくれた。

◆ケース2：焼肉店を営む在日韓国・朝鮮人 Cさん

Cさんは、セメント通りで大きな焼肉店を営んでいる、在日二世である。焼肉料飲業者の会の現理事長を務める。日本で生きる在日二世として、川崎コリアタウン構想について、その心中を語ってくれた。

「一世は、生活に追われていた。二世はそのおかげで高等教育を受けられるようになった。しかし、そうなる、自分たちのアイデンティティがなくなるのでは・・・という心配がある。ここで新しい構想をつくらなければ在日が消滅してしまう。実際、年間6,000人が帰化していて、在日が減少している。これを防ぐためには何か必要である。例えば、教育なり、食文化なり何でも

いいのだ。とにかく場がない。場を作っていこう。心のよりどころとなり、意識の再認識ができるような場を。

工業都市川崎を未来都市として位置付け、一市民として日本人と一緒に地域をつくっていきたい。そして、コリアタウンが川崎の名所になり、地域のプラスになるようにしていきたい。コリアタウンは、共同で行っていかなければならない。人類皆平等の精神が必要である。日本は経済大国としてだけではなく、精神大国になっていかなければならない。

現在、一世が減少し、二世、三世の時代に入り、二世の民族の心は50%、三世は25%となっている。そのようななか、この時期を逃したら、コリアタウン構想というものさえ出てこないであろう。ここでやれなかったら・・・。また、セメント通りだけではなく、川崎、全国規模でやらなければならない。やもすると、構想は焼肉店だけで、焼肉店だけのためにやっているのだ、となってしまうから。

この構想のポイントは二つ。まず一つは、「食文化を広めよう」と「商売繁盛」である。二つめは、臨海部の日本鋼管などの工業遊休地のスプロール化を防ぎ、有効利用のきっかけをつくりたい、ということである。コリアタウン構想は住民の声である。外人がやっているという意識はやめてほしい。心の中では皆思っていたことである。しかし、できるわけがないと思っていた。言いたしたのはえらい。みんなやれば、金銭的にもいい。福祉施設など、日本人も外国人もみんなが使えるような施設をつくっていきたい。国や行政がやってくれば・・・。まあ、夢みたいな話ですけど。」

◆ケース3：食料品店を営む在日韓国・朝鮮人 Dさん

Dさんは、在日二世。桜本商店街で食料品店を営む。留学生を使いながら、一人で店を切り盛りし、休む暇も無い。

「どのようなふるさとをつくっていくかが重要。ふるさとというのは自分の生まれ育った所。川崎から在日を追い出したら何も残らない。一つの新しいまちをつくっていかなくては。そのためには、もっと市とつながっていかなければならない。市の協力や援助が必要。理屈とかじゃなくって、純

粹にここでみんなが集え、文化に触れ親しむことができる場となればいい。たくさんの人が来て、食べ物もおいしいし、こんなかわいいお土産もあるとか、感じてくれればいい。コリアタウン構想は誰もが心の中で思っていた。それを行動に移したのが父である。時代の流れで自然なこと。このまちをつくっていくしかない。」

◆ケース4：日本人住民Eさん

「コリアタウンは一部でやっている。それも南部の人だけ。日本人や北朝鮮の人は、勝手にやってくれと思っている人や無関心な人が多い。はっきりいって、コリアタウンについては日本人は反対。何も言わないけれど気持ちはそうである。地域の人もどういふ現状なのか全くわからないんですよ。だから、事務局の人には「どうなってるの」と一応聞いてみる。実際、実体はない。焼肉屋だって増えていないし、貸店舗あっても日本人の人は焼肉店の人には貸さない。臭いがつくからということだろうけど、その裏はどうかわからない。焼肉料飲業者の会だって、3人くらいぬけたんでしょ。内輪もめじゃないの。南と北の問題もあるみたいだし・・・。けっこう、日本人の意識の中で、韓国人のイメージ悪いんだよ。コリアタウンは、ちょっとねえ・・・。無理なんじゃないのかな・・・。」

◆ケース5：日本人住民Fさん

Fさんは現在80歳。日本鋼管で働いていた。22歳のときから、58年間ここに住んでいる。

「わたしは、通算25年間ほど会長を務めているんですよ。規約をつくり、会をつくるところから。昭和25年から、ここで妻が商店を始めた。最近は

焼肉店が増えたね。商栄会62人中10人ほどが「在日」。うちは「在日」の人に囲まれてんだよ。だけど、近所付き合いはほとんどないし、しない。桜本は、今でも印象悪いね。

コリアタウン・・・あまり知らない。ただ、この辺は日本人が多いから、コリアタウンは難しいんじゃないの。「在日」は1/4くらいでしょう。コリアタウン商店街なんてできたら、みんな会員ぬけちゃうよ。町内会長は「在日」の人はならない。下のほうの役員はやるけど、消極的だし、よりつかないよ。お互い干渉しないね。コリアタウンはどこか違うところにつくってほしい。農楽まつりだって、勝手にやってる。一応協賛する形はとるけどね。向こうの人に対してはよい感情ないんだよ。正面向かっては言わないけどね。お互い言わない。これからだって、この関係は変わらないよ。反日感情は三世になっても一世や二世から受け継いでいるし。戦後保障の問題など、向こうの人の気持ちもわかるけど、今の人に言われてもどうしようもない。もうここには住みたくない。でもいまだ動けない。長いこと住んじゃうとね。住めば都っていうでしょう。」

◆ケース6：日本人住民Gさん

Gさんは、桜本商店街で本屋を経営している。この桜本で生まれ育った。同級生の1/3が「在日」だったという。だから「在日」に対して、違和感も感じないし、抵抗もない。しかし、桜本に住んでいるという、「韓国人が多いだろう」という反応をされるという。正月には遠くからも「在日」の人が買い物に来ている。昔と変わったことは、「在日」の人が名前を隠さなくなったこ

第3表 コリアタウン構想に対する認識

| 年齢 | 在 日 | | 日 本 人 | |
|----|--------|---|---|---|
| 高 | 一 世 | ・子孫に心のふるさとを！ ・老人施設に期待 | ・できっこない ・他の地につくってほしい ・難しいだろう ・地域の活性化の一環として ならいい | (反対多) 一部の人 が勝手に やってる (無関心) 現状わか らない |
| | | ・故郷としての街づくり、心のより所に ・商売繁盛に ・住民としての地域参加 →構想へ熱い思い、夢託す | | |
| | 三 世 | ・関心低い人多い | | |
| 低 | | | | |

とだそうだ。買い物に来た子供達も、父親を「アボジ」、母親を「オモニ」と呼ぶ。しかし、コリアタウン構想については、難しいという。日本人の中にはそれは困るという人が多いからである。一方の桜本商店街は自然発生的にできた。青年部があり、日本人も「在日」も親睦を深め、団結して商店街を背負ってきたという。

(2) 考察

これまでみてきた地域住民のコリアタウン構想への認識を整理してみると、次のように大別できる。まず、顕著なのは、在日韓国・朝鮮人と日本人の認識の違いである。さらに、そのなかでも世代によって認識が異なってくる。

聞き取りを行った在日韓国・朝鮮人は全員二世の人であり、そのコリアタウン構想に対する思いは熱い。人によって思い描くコリアタウン像は様々であり、幅広い。ただ、ここで共通して言えることは、「在日」二世においては、日本（特に川崎）への定住化思考が強いということである。自分の生まれ育った地域社会でこれからも生きていきたいという思いである。地域の掃除をしたり、地域活動にも積極的に参加している。コリアタウン構想についても、始めは「数軒の焼肉店が集まって何ができるのか」という消極派もいたが、「地元の活性化を図るうえでぜひ必要」という積極派の方が多かったという（『統一日報』、1994.6.4）。一世の場合は、帰る場所もなく、もうここで住んでいくしかないという思いと日本で生活していく子孫に対する思いやりの気持ちから、ふるさととしてのコリアタウンを残したいという思いが強い。また、一世は高齢化し、老後問題についても関心が高くなっており、老人会館を含むコリアタウン建設への期待も大きい。しかし、その一世、二世の気持ちとは裏腹に、「在日」三世のコリアタウンへの関心は低いようである。

一方、日本人住民に関しては、在日韓国・朝鮮人住民とは対照的にコリアタウン構想をとらえている。全体的に「コリアタウン構想は、一部の人が勝手にやっている」という認識が強い。それゆえ、「自分の住んでる町をコリアタウンにする気か」という強い反発もある。コリアタウン構想に関しては、「そんなのできっこない」とか、「他の土地につくってほしい」といったように消極的な

態度を見せている。日本人住民はこのように無関心か、反対の人が多。その裏には、強い民族対立のような感情がある。この地域の日本人住民の在日韓国・朝鮮人に関するイメージは悪く、よい感情をもっている人が少ない。同じ日本人でも、この地域住民ではない人のコリアタウン構想に関する反応は異なる。焼肉店の日本人客には、「コリアタウンが川崎の名物になれば」とか、「食は世界共通だからうまくいくのでは」という好意的な意見がみられる。知人にコリアタウンの話をして、賛成派が多い。

6. コリアタウン構想をめぐる課題

(1) 行政の対応とその課題

神奈川県をはじめ、川崎市などは「共生」や「内なる民際外交」を掲げ、在日外国人問題に関しては先進国と言われている。そのなかでも、在日韓国・朝鮮人問題は、中心的課題であり、その原点でもある。しかし、神奈川県において、外国人に関する施策が本格的になされるようになったのは、80年代に入ってからのことである。県では外国籍県民の生活実態調査を行い、本として刊行したり、県民向け啓発冊子なども作成している。また、県職員の採用枠拡大や指紋押捺義務の廃止などの法的地位向上にも努めてきた。しかし、これらは、在日外国人の自助努力によるものである。

コリアタウン構想においても、セメント通りのモール化などの景観整備を市に要請している。市では話がまとまり次第、支援したいと語っている。「在日」住民と日本人住民との両者の立場を考えて動かなければならず、慎重のようである。また、コリアタウン構想に関しては「（コリアタウンを）地域からの国際化に向けて役立てなければならず、市のプロジェクトの中に取り入れていく。コリアタウンは、都市の魅力の一要素として重要な役割を果たす。」とも言っている。その一方で、構想はちょっと話が膨らみ過ぎており、市のプロジェクトとの矛盾も感じてはいるようである。

ここで注目すべき点は、川崎においては、在日韓国・朝鮮人から行政に対する要請を行ったり、コリアタウン構想が打ち出されたりと積極的な市政参加や地域参加が見られることである。その原動力はかれらの同じ地域社会に住む他の住民と対

等であるという認識である。聞き取りでの「(コリアタウン構想は)外国人がやってることと思わないでほしい。」といった声にも表れているように、自分たちは外国人住民ではないという主張もみられる。ニューカマーと自分たちを区別しているのもそのためであろう。しかし、一方で、外国籍であることで、祖国とのつながりや「在日」のアイデンティティを保ち続けているがゆえに、参政権獲得に抵抗を示す人もいる。今日、これらの内面的な問題も含め、市民として生活していく在日韓国・朝鮮人をはじめ、急増する外国籍住民にどう行政が対処していくかが問題となっている。まずは、「地域住民から外国人市民政策への支持をとりつけていくこと」(分田, 1995: p.61)が先決であろう。そうすれば、参政権はないが納税の義務を果たしている外国籍住民に対しての「うちの税金をなんで外国人のために使わなければならないのか」といったような日本人住民の声もなくなるのではないであろうか。

(2) 地域社会の対応とその課題

いちばん大きな課題としては、コリアタウン建設を担っていく組織をつくっていくことである。現在、コリアタウン構想は焼肉料飲業者の会やコリアタウン協会設立準備会が中心となって進めており、積極的に財団化を試みているが、まだ実現されていない。発足当初に開いたシンポジウムでは組織化には至らなかった。つい最近では、かなり大規模な“全国コリアタウンサミット”も主催。その成果はまだ明らかではないが、関係者のこれにける財団化に向けての期待は大きいものがあつた。コリアタウン構想には関心をみせても、具体的に何をやればいいのかわからない人や一部の人が勝手にやっていることと思っている人が多い。そこに、民団や総連がからんでくると、一層その傾向は強い。また、民団や総連としては、個人的に賛成の人多くても、組織的な援助は難しいらしい。さらには、現在、「在日」二世が中心となっているコリアタウン構想ではあるが、それを受け継いでいく三世はどうみているのかということが問題となってくる。三世の構想への関心は低い。三世においては、「民族なんてどうでもいい」とか、「在日」離れが深刻となってきている。コリアタウン構想が成功するかどうかは、三世たちが

どう受け継いでいくかにもかかっているのではないであろうか。

また、コリアタウン建設に向けては、地域住民の理解を得ることも重要である。コリアタウン構想に反対する日本人住民が多く、なかなか理解は得られてはいないのが現状である。それは、「コリアタウン構想についてほとんど知らない」という地域住民が多いためであると思われる。コリアタウン構想がどのような内容で、現在どのようなことが行われているのか、地域住民への情報提供が十分になされていないことからくる反感である。また、地域活性化の意味合いもあるコリアタウン構想を進めていく主体は地域の在日韓国・朝鮮人である。コリアタウン協会設立準備会事務局長は日本人であるが、地域の日本人住民が含まれていない。それ故、地域の日本人住民に在日韓国・朝鮮人が勝手にやっていることと思われてしまうのではないであろうか。また、「在日」の人への聞き取りで、皆が「今まで「在日」は地域に積極的に参加しなかった。」と口にする。それは、日本人住民の指摘するところでもある。それが、急に地域参加してくるようになってきたことへの戸惑いも日本人住民のなかにはあつたようである(「統一日報」, 1994. 6. 15)。

「在日」を多数抱える地域社会においては、深い部分でまだ「在日」と日本人とが背を向けあっている。コリアタウン構想などが打ち出されたこと自体、「異質性排除」といわれた日本の地域社会においては画期的なことであると思う。「共生」を掲げている行政のもとで、一見そうであるかのごとくみえる地域社会も、地域住民一人一人の話をきいていくことで、実態が明らかになってきた。お互い正面きつては言わない、表面上には出さないだけで、それぞれが様々な思いを内に秘めている。コリアタウン構想への「在日」住民と日本人住民との認識のしかたの違いも、論争を闘わせる場をもたないばかりにどんどん食い違っていってしまっているのではなからうか。

7. おわりに

本稿では、川崎区という同じ地域社会に住む日本人住民や「在日」住民への聞き取りを進めていくことで、コリアタウン構想立案の背景にも迫る

ことができた。この構想の背景には、在日韓国・朝鮮人をはじめとする在日外国人への、現在の地域社会における「高齢者問題」や「リストラクチャリング」などのしわ寄せがある。これは、日本社会の外国人施策の在り方への見直しを問いかけるものでもある。徐々にではあるが、日本政府の対応や地域社会の受容も進んできており、「在日」を取り巻く環境も変わってきている。世代がかわっていくにつれ、構想への認識もよいものへと変わっていくであろう。長い目で見ていく必要がある。そして、日本社会はこのような「在日」の能動的な動きをしっかりと受け止めて行かなくてはならない。

最後に、見ず知らずの学生の話に耳を傾け、話を聞かせてくださった方々に深く感謝したい。

注

- 1) エスニックメディアとしての『統一日報』は「同胞の住む街」として川崎・桜本を取り上げ、地域の変容と今後をめぐる特集を組む。
- 2) おおひん地区といわれる地域は、桜本1・2丁目、池上町、大島3・5丁目、浜町3・4丁目である。この名称は、桜本の“桜”と大島の“大”から「おお」をとり水のイメージを「ひん」として、「おおひん」と名付けられている。
- 3) 4) 1946年10月、協和会出身者や一部の民族主義者が在日本朝鮮人同盟に対抗して在日本朝鮮居留民団(民団)を組織する。そして、1955年には在日本朝鮮人総連合会(総連)が結成される。総連は、在日朝鮮人が北朝鮮の海外公民であるとし、祖国の平和統一などの民族的な課題を一義的なものとした。

文献

- 神奈川県在住外国人実態調査委員会(1990):『日本のなかの韓国・朝鮮人, 中国人—神奈川県在住外国人実態調査より』明石書店
- 神奈川県自治総合研究センター編(1984):『神奈川の韓国・朝鮮人』公人社神奈川と朝鮮の関係史調査委員会(1994):『神奈川と朝鮮』, 神奈川県渉外部
- 田嶋淳子(1995):世界都市・東京にみる重層的な地域社会の現実. 奥田道大編『コミュニティとエスニシティ』勁草書房, 115-170.
- 谷富夫(1995):定住外国人と民族関係—大阪市生野区の事例—. 都市問題, 86-3, 31-43.
- 曹賢美(1995):在日韓国人高齢者の職業状況—東京都大田区の場合—. 経済地理学年報, 41-1, 57-69.
- 文貞美(1994):在日コミュニティの可能性—東京荒川区の済州島・高内里出身者の居住史. 奥田道大編『外国人居住者と日本の地域社会』明石書店, 129-191.
- 分田順子(1995):川崎市における外国籍住民の市政参加—在日市民の市民権の現状とその確立要件—. 宮島喬編『地域社会における外国人労働者—日欧における受け入れの現状と課題—』, 53-61.

資料

- 川崎コリアタウン協会設立準備会:川崎コリアタウン構想案. 1995.
- 川崎市総務局総務部統計課:川崎市統計書. 1985~1995.
- 統一日報:同胞の住む街—川崎・桜本編. 1994. 4. 21. ~1994. 6. 16.